

# 雪の精

野村胡堂

—

昼頃から降り続いた雪が、宵に小やみになりましたが、それでも三寸あまり積って、いまど今戸の往来もおうらいハタ絶えてしまいました。

えちごや越後屋佐吉は、女房のお市と差し向いで、長火鉢に顔をほてらせながら、二三本あげましたが、寒さのせいか一向発しません。

「銭湯へ行くのはおつくうだし、あんま按摩を取らせたいにも、こんな時は意地が悪く笛も聞えないね」

「お前さん、そんな事を言っただって無理だよ。この雪だもの、目の不自由な者なんか、歩かれはしない」

そんな事を言いながら、丁度三本目の雫しずくを切った時でした。ツイ鼻の先の雨戸をトン、トン、トンと軽く叩く者があつたのです。

「おや——」

お市は膝を立て直しました。宵とは言つてもこの大雪に往来の方へ向いた、入口の格子を叩くならまだしも、川岸かしへ廻つて、庭の木戸から縁側の雨戸を叩く者があるとすると、全く唯事ではありません。

「どうしたんだい」

と、佐吉。

「雨戸を叩く者があるんだよ。こんな晩にいやだねえ、本当に」

「開けて見な、貉むしなや狸たぬきなら、早速煮て食おうじゃないか。酒はまだあるが、肴さかなと来た日には、ろくな沢庵たくわんもねえ」

佐吉は少し酔っているせいもあつたでしょう。爪楊子つまようじで歯をせせりながら、

太平楽を極めますが、いくらか酒量の少ない女房のお市は、さすがに不気味だったと見えて、幾度も躊躇ためらいながら、それでも立ち上がって、雨戸へ手を掛けました。

同時に、もう一度トン、トン、トンと軽く叩く音、続いて若い女の声で、「ここを開けて下さいな——」

と、大地の底から響くような細い声が、ハッキリ雨戸の外に聞えるのです。

「誰だえ」

お市は心張棒しんはりぼうを外すと、思い切つてガラリと開けました。

かくべえじし

角兵衛獅子の親方を振り出しに、女衞せげんの真似をやってたり、遊び人の仲間へ入つ

たり、今では今戸に一戸を構えて、諸方へ烏金からすがねを廻し、至つて裕福に暮してい

る佐吉の女房です。鬼の亭主に鬼の女房で、大概たいがいの物に驚くような女ではあり

ませんが、この時ばかりは全くギョツとしました。

外は真つ白——。

人間は愚か、むしな貉も狸もいる様子はなかつたのです。

好い加減に積つた雪は、狭い庭を念入りに埋めて、その上に薄月が射しているのですから、その辺には、物の隈もありません。庇ひさしの下はほんの少しばかり埋め残してありますが、物馴れたお市の眼には、そこに脱ぎ捨ててある、沓脱くつぬぎの下駄までハッキリ読めるのです。

「誰もいはししない、変だねえ」

「そんな事があるものか、今の人の声がしていたじゃないか」

「そう言ったってお前さん、猫の子もいないよ」

お市はそう言いながら、戸袋に左手でつかまつたまま、まだサラサラと降る雪の中へ、何の気もなく顔を突き出したのでした。

「あッ」

恐ろしい悲鳴。

驚いて佐吉が立ち上がった時は、お市の身体は、もんどり打って、雪の庭へ――、真逆まっさかさま様に落ちてしまったのでした。

「何て間拔けな事をするんだ。怪我けがをしないか」

佐吉はそう言いながら、縁側へ飛出して差のぞくと、お市の身体は雪の中に転落して、ノタ打ち廻りながら、

「お化ばけだッ」

辛からくもそう言った切り、がっくり崩折くずおれてしまった様子です。見ると、頸筋から噴出ふきだした恐ろしい血潮が、お市の半身と、その辺の雪を物凄まじく染めておりますが、見渡したところ、縁の下にも、庭の中にも、お化は愚おろか、人間の片かけも見えません。

佐吉はそれでも、漸く気を取直して、女房の身体を縁側へ抱き上げましたが、

何時の間にやら、行燈あんどんを蹴飛ばして、灯りを消してしまつた事に気が付きました。

「お駒、大変だッ、灯を持って来い」

少し離れているお勝手へ怒鳴どなると、

「ハ、ハイ」

居眠りでもしていたらしい、下女のお駒は、手燭てしよくを持って飛込んで来ましたが、その時はもう、何もかも済んでおりました。お市はすっかりこと切れて、三十女の豊満な肉体を、浅ましく歪ゆがめたまま夫の膝に抱き上げられ、越後者の、身体だけは丈夫そうな下女のお駒は、手燭を持ったまま、ガタガタ顫えているのでした。

「八、こう言うわけだ。石原の兄哥あにぎの縄張りだが、利助兄哥はあの通り身体が悪くて、娘のお品さんが代って仕事をしている有様だから、どうすることも出来ない。それに、越後屋佐吉と言う人が自分でやって来て、相手が人間だか化物だか知らないが、あんまり人を馬鹿にしたやり口だから、何とでもして女房かたきの讐を討つてくれと言う頼みだ」

捕物名人銭形の平次は、子分の八五郎——一名ガラツ八へ妙にしんみりした調子で話して聞かせました。

少し人間は半間ですが、案外鼻の利く八五郎に、少しでも事件を扱わせて、行く行く立派な御用聞に仕立ててやろうと言う平次の腹でしょう。

「親分、大変面白そうだが、下手人げしゅにんは一体何でしょう」

「それが解らない」

「鎌鼬かまいたちか何かじゃありませんか」

小さい旋風せんふうが空中に真空の場所を作るために、そこへ行合かまいたちさせた人の皮肉を破やぶつて、体内の空気が出ることもあるのを、昔は鎌鼬かまいたち又は神逢かみあ太刀たちと言いつて恐おそれたものです。

「相変あひらずお前はお先まつ走りだね、庭の雪には下駄の跡があつたんだよ」

「へエ——」

「鎌鼬がまさか下駄げだを穿はいて来きはしまいと平次。

「それじゃ矢張り人間かな」

どうも甚だ血の廻りが宜よろしくありません。

「お市とか言う女房にようばうの喉笛のどぶえを下から飛付といて搔かき切きつたんだ。兎うに角人間には相違ちがないだろう」



「佐吉夫婦に怨うらみのある人間はありませんか」

「あり過ぎるほどだ」

「厄介な野郎だネ」

「角兵衛獅子の親方と、女衞ぜげんと、金貸しをやつてたんだ。どこに敵がいるかわかるものか」

「へエ——」

「ここで考えたつて始まらないよ。兎に角、行って見るがいい、思いの外手軽に解るかも知れない」

「親分は？」

「俺はそれからの事にしよう。他に用事もあるから、兎に角、今戸の殺しはお前に任せるよ。宜いかい、八」

「弱ったなア」

「弱ることがあるものか、八五郎もこの辺が手柄の立て所じゃないか」

「そう言えばそれに相違ないが」

子分思いの平次は、これほどの手柄を、ガラッ八に譲ゆずつてやるつもりでしょう。二つ三つ肝腎かんじんな注意をすると、わが子の初陣ういじんを送り出す親のように、緊張した心で今戸いまどの現場へ送り出してやるのでした。

ガラッ八が越後屋へ着いたのは、事件のあつた翌る日の昼頃、係り同心が町役人と一緒に引揚げた後で、お市の死体は奥の一と間へ寝かし、三輪みのわの万七と、いう顔の古い御用聞が、二人の子分と、振舞酒ふるまいざけに酔つて、ボツボツ引揚げようという間際でした。

「お、八兄哥か、大層鼻が良いんだネ」

と万七。まさか主人の佐吉が、親分の平次へ頼みに行つたことは知りません。相手が甘いと見て、少し、から、か、い、面、になります。

「三輪の親分御苦勞様で、——石原のが身体が悪いんで、あつしが申訳もうしわけだけに覗きに來ましたよ。三輪の親分がいて下されば、ここから帰つても宜い位のもので、——へッへッへッ」

これは、親分の平次に、万一、三輪の万七に逢つたらこうとくれぐれも教わつて來た口上。まことに行届いておりますが、お仕舞いのへッへッへッだけが余計です。

そう言われると、万七も悪い心持はしなかつたのでしよう。それに、どつちにしても石原の利助の縄張りうちで、八五郎をからかい過ぎるわけにも行かず、もう一つは、事件がいやに神秘的で、容易に見当が付きそうもないと思つたのでしよう。

「そう言われると年寄の出しや張る幕じゃないようだ。八兄哥、話は聞いたろうが、どうもこの殺しは見当が付かないぜ」

そう言いながら、二人の子分と顔を見合わせて、妙にニヤニヤしております。意地の悪そうな四十男。世上の噂では、一二足の草鞋にそく わらじも穿いていると言う話、八五郎の相手には、少し荷が過ぎます。

三

越後屋佐吉と言うのは、四十を越したばかりの、北国者らしい鈍重どんちゆうなうちに、何とか強したたか味のある男ですが、女房が不思議な殺されようをしたので、さすがに、すっかり度を失っております。

早速八五郎を一同へ案内して、北枕きたまくらに寝かしてある、女房お市の死体を見せてくれました。覆おおいを取ると、斬られて死んだ者によくある、白蠟はくろうのような感じのする顔で、年の頃三十五六、神経質な口やかましい女ということ、八

五郎にもよく受取れます。

傷は頸きずの右の方から喉笛へかけて、斜ななめ一文字に深々と口を開いて、見るも無気味な有様、これでは一たまりもなかったでしょう。

「血が出ましたか」

「出たの出ないの——庭の雪が真つ赤になりましたよ」

有名な銭形の平次が来ずに、少し好人物らしい子分の八五郎が来たのが、佐吉しやくの癩しやくにさわったのでしよう、物の言いようが少しばかり、突慳つっけんどん貧どんです。

「フーム」

ガラッ八は唸うなりました。

「八兄哥、血のことを気にするようじゃ、鎌鼬かまいたちという見当だね。鎌鼬は傷の深い割に血の出ないものだって言うが、江戸は上様うえさまのお膝元で、鎌鼬は昔から出ねえことになっているぜ」

と首を出した万七。冷笑気味な口吻こうぶんですが、馴れた目だけに、どこか鋭いところがあります。

「――」

ガラツ八は黙って點頭うなずきました。鎌鼬かまづでないことは、親分の平次にも言われましたが、傷口その反り具合があまりに見事だったので、ツイ自分の最初の心に立ち返ったのでした。

「それによ、八兄哥。左利きの鎌鼬かまづつてものはあるめえ」

万七は言い得て妙と言った顔で、死体の右の頸筋ななめ――人間の手で上から切り下げた、斜ななめの傷口を指すのでした。

「曲者は下駄はを履はいていたそうですね」

とガラツ八。

「踏み荒してしまつたが、まだ庭に雪がありますから、見当位は付きます。こ

うお出でなさい」

佐吉に案内されて、次の間へ行くと、縁側に近く長火鉢を置いて、すべての調度は昨夜のまま、障子を開けて一と目庭を見ると、成程散々に踏み荒しましたたが、消え残る雪の上には、血とも煤すすとも付かぬ程度に、薄赤い斑点はんでんが見られないことはありません。

「下駄の跡は一人でしたか」

「庭の中にはかなり足跡もありましたが、皆んな同じ齒の跡で、木戸から入って出たのは一人分だけでしたよ。」

ガラッ八も途方にくれました。十坪ばかりの狭い庭には、亭主の殺風景な性格を反映して、石一つ、植木一本ない有様、僅かに戸袋の側の手洗鉢ちようずばちの下に南天なんてんが一株ひとかぶありますが、それと言っても、人間が潜りもどうも出来るほどのものではなく、狭い場所一パイに建てた家で、たった一つの庭木戸の外には、往来へ

出る道も、表へ廻る路地もありません。

「木戸の向うは川岸かしつ縁ぶちの往来ですね」

「そうですよ、あの雪で昨夜は人通りも少なかったようですが、それでも宵のうちですから、チラホラ、通らないことはありません」

と佐吉。

「この辺に、お前さんを怨うらんでいる者はありませんか」

「ありますよ、どうせ良く言われっこのない性分で、町内の人が皆んな敵見たいなものでさア——」

少し言い草は乱暴ですが八五郎の半間な調子に業ごうを煮せいやした故せいもあつたでしょう。佐吉は忌々いまましそうに舌打をしました。

#### 四



「雇人は？」  
やといにん

「二人いますよ。一人は越後者で、お駒と言う下女、一人は房州者で、これは借金の取立てや使い走りをさせておりますが、与次郎という男。もつとも、この与次郎の方は、町内の銭湯へ行っていて、女房が殺された時は家にいませんでしたよ」

佐吉のそう言うのを聞きながら、八五郎は障子を締めると、今度は家の中の間取りを見て廻りました。入口の格子の右が女中部屋で、その先がお勝手、お勝手はすぐ横町の路地へ、木戸一つで通ずるようになっておりますが、御用間の出入りがあるので、この辺の雪も踏み荒されております。

入口を隔へだてて、左が死体を置いてある部屋、その奥が夫婦の居間で、これは昨夜事件のあったところ。妙な間取で、座敷か納戸なんどを通らなければ、居間から

直接お勝手へは出られません。

下女のお駒は、流し元で遅い朝飯のお仕舞をしておりました。二十三四の色白の女で、様子もそんなに悪くありませんが、半面の<sup>おおやけど</sup>大焼痕で、顔を見るとがっかりします。

姉妹二人、角兵衛獅子に売られたのを、佐吉が引取って暫く稼<sup>かせ</sup>がせていましたが、角兵衛を<sup>はいぎょう</sup>廃業してからは、下女にして使って、少しは給金でも溜めさせて、故郷の越後へ帰すつもり——と佐吉は問わず語りに説明してくれました。

もつとも、このお駒というのは、妹の方で、姉はお才<sup>さい</sup>と言って、大変に良い繚<sup>りょう</sup>緻<sup>ち</sup>だったが、一年ばかり前に死んでしまった——とこれも佐吉の話。自分の事を噂されながらも、お駒は鈍<sup>どん</sup>感<sup>かん</sup>な女によくある無関心さで、機械的にお勝手の仕事を続けております。

「お駒さん、昨夜<sup>ゆうべ</sup>は驚いたろう」

ガラツ八が水を向けると、

「驚いたよ、お神さんがおっ死んだんだもの」

何を当り前な事を——と言わぬばかりの面構つらがまえは、すっかり我が名御用聞の八五郎を憂鬱ゆううつにしています。

「お神さんの殺された場所で、何か見るか聞かしかしなかつたかい」

「旦那が大きな声で、灯あかりを持って来いって言うから、柵たなの上の手燭へ灯を移して、大急ぎで飛んで行つただよ、何も聞くもんか」

これでは取り付く島もありません。

角兵衛獅子をやつて歩いたというのは、多分十年も前のことでしょう。見たところ、楽な奉公によく肥つて、そんな芸当をやつた身体とも見えないのです。

ガラツ八は仕様事なしにお勝手口の外を眺めました。取込みでろくに雪も搔かかなかつたのでしよう、下男の与次郎が、浅葱あさぎの手拭を頬冠ほおかむりに、竹箒たけぼうしでセツ

セと雪を払っております。師走しわすの薄い日に、昨夜の雪がまだ解けそうにもないので、仕事をしていると、寒さが骨身にこたえるのでしよう、時々立止つては、ハアアと拳骨げんこつに息を吹掛けております。

「八兄あにい哥」

後ろから、肩を叩いたのは、三輪みのわの万七。

「何ですえ、親分」

「気が付かないか」

「へエ——？」

「それなら宜い、後で縄張りがどうの、石原がこうのって文句は言わないだらうな？」

妙からに絡んだ物の言い廻しです。

「下手人の目星でも付きましたか」

「そうだよ。八兄哥、後学のために話そう、あれを見るが宜い」

万七の指したのは、お勝手の外を掃はいている、与次郎の箒ほうきを持つ手です。

「――」

「あの箒を持つ手が、恐ろしく不自由なのに気が付かないかい」

「そう言えばそうかも知れませんネ」

「そうかも――じゃないよ、あの与次郎と言う男は確かに左利きだ」  
ひだりき

「えッ」

「先刻、下手人は左利きだ――って俺が口を滑らしたのを小耳はきに挟んで、疑わ  
れたくないばかりに、不自由な思いをして右利きのような顔をして、俺達から  
見えるところで雪を掃はいてるんだ。イヤな細工じゃないか」

「成程」

万七に注意されて、そっと与次郎の方へ目を走らせると、箒ほうきを持ったのは右

手には相違ありませんが、成程不自由そうで、その作為さくいのあとが、一と目でわかります。

「主人に聞くと、あの野郎、たしかに左利きだと言う事だ。ね、八兄哥、御用聞はこう言う細かいところへ眼が届かなくちゃ物になられえよ」

万七はそう言いながら女物の下駄を突かけてお勝手口へ出る。

「与次郎とか言ったネ、ちよいと訊きてえことがある、番所へ一緒に来て貰おうか」

釘抜くぎぬきのような手が、ピタリと、箒を持つ手頸に掛りました。

「あつ、何をするんだ」

立ち竦すくんだ与次郎、浅葱あさぎの頬冠こそしてありますが、苦味走った三十男、咄嗟とっさの間に、万七の手を振りもぎって逃げようとすると、

「御用ッ」

「神妙にしろッ」

路地しつぷうから二人の子分が疾風の如く飛込んで来るのでした。

## 五

万七にしてやられて、ガラツ八の八五郎は、まつしぐら驀地に神田へ取って返しました。

「親分どうかしておくんなさい。私はこんな恥を搔かされたことがない」

「馬鹿野郎、又何かドジな真似をしたんだろう。見て来た通り、真っ直ぐに話してみな」

銭形の平次は、八五郎を叱り飛ばして、報告の順序を立てさせました。

「何？ 庭には、川岸かしの往来に向いた木戸より外に入口も出口もねえ、——銭湯へ行つたと言う、与次郎が疑われるわけだな、足跡の様子では下駄は、女物

か、男物か」

「それが時が経っているのと、散々に踏み荒しているから、まるつきり解らねえ」

「仕様がねえなア、銭湯へは行って訊いたろうな、越後屋の女房が殺された時刻に、与次郎が行っていたかどうか」

「そんな事にぬか抜きはねえ。朝日湯の番台の親爺に訊くと、亥刻よつ（十時）少し前にやって来て、自慢の咽のどで新内を唸りながら半刻はんときばかりポチャポチャやっていったって言いますぜ」

「人でも殺そうと言う程の野郎なら、わざと半刻位は下手な新内でも唸っているだろう。後か先に、ほんのちよいと庭口へ廻れば、仕事は済むんだから」

「親分までそのつもりじゃ話が出来ねえ」

ガラツ八はすっかりしよげ悄気てしまいます。



「ところで、死骸の傷は斜横に真一文字に付いてると言ったね」

「そうですよ」

「かまいたち鎌鼬なら、錢形に付くか、筋か骨に添って曲った傷が付くから、矢張り人が切ったに間違いはないね、——ところで、切口の肉は、どんな工合になっているんだ」

「それが可怪おかしいんだよ、親分、恐ろしく反そって、何かこう鉞まさかりでも割いたような工合だ」

「斧おのや鉞のどで、喉を割く奴はあるまい、峰みねの高い刃物——多分合せ剃刀かみそりかな」  
「えッ」

合せ剃刀と睨けいがんんだのは慧眼ですが、それにしても下手人は益々わからなくなるばかりです。

平次は到頭いまだ今戸まで出掛けて見る気になりました。三輪の万七の鼻を明かす

つもりは毛頭なかつたのですが。

「下手人は左利きと聞いて、自分の左利きを隠そうとしたと言うのはおかしいな。そんな事をしたところで、主人か下女に訊かれれば、すぐ解ることだから、脛すねに傷持つ者なら、反つてそんな細工はしたい筈だ。これは少し面倒なことになるかも知れないよ」

平次はそう言いながら、ガラツ八を案内に、今戸へ出かけて行つたのです。

越後屋へ行く前に、近所でいろいろ噂を聞いて見ましたが、佐吉夫婦の評判はまことに散々で、冗談にも褒める者は一人もありません。

欲が深くて因業いんごうで、若い時から随分人を泣かせて来た様子ですから、どこに深怨しんえんの刃やいばを磨く者があるかも知からない情勢です。

下男の与次郎が、殺されたお市と何か関係でもあるのではないかと言う疑いも、一応は持ってみましたが、これも問題になりません。お市は四十近く、与

次郎は三十になつたばかり、女の方はヒステリックな、どちらかと言えば醜女ぶおんなで、与次郎は、こんな仕事をしている者には勿体ないような好い男、町内の娘つ子が大騒ぎをしているばかりでなく、岡場所やけころにぎこぶしへ握り拳こぶしで出かける程の色師です。

金が目当て——とすることも考えられますが。それなら、女房だけ殺して、姿を隠したんでは一文にもならず、二度出直す時間もあつた筈なのに、それつきり逃げ出してしまったのは、多分、下手人の方でも、人を一人殺して、面喰つたためだろうと思われます。

平次は一応家の内外を調べた上、いよいよ自分の考えを確かたしかめたらしく、主人の佐吉に何やら耳打ちをして、誰を縛るでもなく、懐手のまま神田へ帰ってしましました。

それから三日目の朝、越後屋の佐吉は、蒼あおくなつて、平次のところへやつて来ました。

「親分、昨夜ゆうべもやつて来ましたよ」

「えッ」

「与次郎が縛られたから、それで宜いのかと思うと、あれは三輪の親分の見当違いでしたね」

「どうなすつたんだ。詳しく話くわして見なさるが宜い」

平次も思わず膝を乗り出します。

「こうなんです、——女房とむらの葬とむらいを済ませて、やれやれと思うと、又雪でしょう。お駒に一本つけさして長火鉢の前でチビチビやっていると、彼れこれ亥刻よつ過ぎだったでしょう。庭の雨戸を、又トン、トン、トンと叩く者があるのです」

雪の精



©2017 萩 柚月

平次も、側で聞いているガラッ八も。思わず、ぞつとしました。

「暫く黙っているると、女のか細い声で、——ちよいと開けて下さい——と言ったようですが、何分あの騒ぎの後でしょう、頭から水をブツかけられたようになったて、<sup>はず</sup>恥かしい話ですが動くことも出来ません。そのまま凝<sup>じ</sup>つとしていると、それつきりあきらめて帰った様子です」

「——」

「翌る朝、夜の明けるのを待ち兼ねて、庭を開けて見ると、下駄の跡が一パイ」  
佐吉はゴクリと固唾を呑みます。

「それは面白くなって来た——越後屋さん、帰ったら、近所中へこう言いふらして下さい——昨夜も変<sup>へん</sup>な野郎が来て今度は俺を誘<sup>おび</sup>き出そうとしたが、雪のせいで腹が痛くて顔を出せなかった。今度来たら、キツと女房の下手人の顔を見定めてやるから——と」

「少しも面白くはありませんが、やって見ましょう。だが、私はもう一度来て  
も、顔を出すのは御免を蒙りますよ」

強かしたた者らしい佐吉も、この『見えざる敵』にはすっかり脅かおびやされた様子です。

「大丈夫、相手は雪の晩でなきやア来ないと解ったようなものだから、この次  
の雪の降る晩に、私か八五郎が、そつと戌刻いっつ（八時）前から行って庭口から入  
れて貰いましょう。それなら心配はないでしょう」

「へエ——、まア、そうまでして下されば」

佐吉は呑込のみこみ兼ねた様子で帰って行きました。

## 六

よく雪の降った年ですが、それから七日ばかりは晴続き、押詰って、二十四

日、夕景から催もよおした雪が、宵には綿を千切つて叩き付けるような大降りになりました。

越後屋から迎えを待つまでもなく、ガラツ八は今戸へ駆け付け、庭口からそつと例の部屋へ入り込みました。

飲み物も食い物もフンダンに用意させましたが、人が来ることは誰にも話させず、下女のお駒も、宵のうちから床へ入れて楽寝をさせ、佐吉一人、淋しく待っているところへ、八五郎が行ったのですから、佐吉の喜びと言うものはありません。

半分は手真似てまねで物を言つて、長火鉢を間にした差向い、妙に黙りこくつて飲んでいると、やがて、亥刻過よつぎ。

雨戸は一種のリズムを持って、トン、トン、トンと鳴ります。八五郎は懐の十手を抜いて、そつと立上がると、



「待つて下さい。私の顔を先に見せなきやア、逃げるかも知れません」  
佐吉もすっかり胆きもが坐った様子で、八五郎を押えると、雨戸へ手を掛けてサツと押し開けました。

闇から湧き上がったように、サツと吹込む一団の吹雪、それに包まれると見るや、

「あッ」

佐吉は額を押えて縁側へ倒れました。

「曲者ッ」

続いて八五郎、一気に闇の庭へ、跣足はだしで飛降りましたが、四方は塗つぶり潰したような大吹雪おおふぶきで、黒い犬っころ一匹見付かりません。

引返して見ると、額から頬へ見事に斬り割かれた佐吉、漸ようやく起き直って、血だらけな半面を両手で押えているのでした。

それからの騒ぎは書くまでもありません。幸い傷は浅かったので、用意の焼酎しょうちゆうで洗うつて、晒さらしでグルグル巻くと、寝呆けたお駒を叩き起して。町内の外科を呼ばせました。

少し落着いたところで、いろいろ訊いて見ましたが、唯、雨戸を開けると同時に、一団の白い吹雪を顔へ叩き付けられたように覚えると、額から頬へ、焼鑊やきごてを当てられたように感じて引くり返ったと言うだけの事、誰が斬つて、どうして逃げたかまるつきり見当も付かない始末です。

翌る朝、神田から銭形の平次が駆け付け、三輪の万七もやって来ましたが、庭の足跡は、踏み荒されない代り、今度は雪に埋まってしまつて、八五郎が入つたのも定かでない有様、曲者はどこから来て、どこへ逃げたか、嗅ぎ出す手掛りと言うものは一つもありません。

散々責めたが、何としても白状をしない与次郎は、これを機会しおに許されて帰

りました。お市を殺したのも、佐吉を襲おそったのも、手口は全く同じことですから、三輪の万七も、この上与次郎を責める口実もありません。

それに、銭形の平次は、

「三輪の、そう言っちゃ濟まないが、下手人は左利きじゃないよ」

と言い出したものです。

「えッ、どうしてそんな事が解るんだ」

万七の唇は少し尖とがりますが、平次は事もなげに、

「刀か脇差だと、これは左利の業だが、傷の工合じゃ、どうしても得物えものは合せ剃刀かみそりだ。ネ、そんな短かい物で人の命でも奪ろうとすると、逆手さかてに持たなきやア役に立たないよ。右の喉笛や、右の頬を、斜ななめに斬り下げたのはそのためだ。突き傷のように、恐ろしい力で下へ斬り下げているだろう」

「なある——」

三輪の万七、一言もありません。

併し、右利きとわかったところで、下手人の当りが付いたわけではありません。右利きは左利きの十倍もあるのですから、僅かに、与次郎が下手人でないと言いますが、消極的に解つただけの事です。

## 七

その時、妙な者が訪ねて来ました。

「銭形の親分さんが来ていなさるようですが、ちよいとお目にかかつて申上げたいことがあります」

お駒に取次がせたのは、この辺に網を張って、吉原へ通う客を拾う辻駕籠の若い者——、と言ったところで、四十過ぎの世帯疲れの目立つ、不景気な駕籠

屋が二人でした。

「私に用事と言うのは、お前さん達かい。取込み中で、お通しは出来ないが、ここで聴かして貰いましょう。どんな事なんだい」

銭形の平次は、あがりがまち上框へ煙草盆をブラ下げて来て、お駒に座布団などを持って来させました。

「昨夜、実は妙なことがあったんです。——言おうか言うまいか、相棒とも相談したんですが、ここのお神さんが殺されたり、旦那が怪我をなすつた——ことを聞くと、黙ってでもいられません」

「そうともそうとも、気の付いた事があつたら、何でも話した方が宜い。決して掛り合いなどにはならないようにしてやるから」

「有難う御座います、実はこうなんで、親分さん——」  
年取った駕籠屋の話と言うのは、実に奇怪を極めました。

——昨夜、亥刻少し過ぎ、この二町ばかり先の稲荷の祠の前で、降る雪を凌ぎながら、少し小止みになったら、馬道の方へでも出て、吉原通いの客を拾おうと相談をしていると、どこから出て来たか、チヨコチヨコと現われた一人の娘が、白い手拭を吹き流しに冠って、観音様まで大急ぎでやってくれと言ったのだそうです。

どうせ帰り道、相手は新造ですから、賃銀なんか宜いかげんに定めて、駕籠の垂をあげると、娘は小風呂敷包を持ったまま、馴れた調子でポンと乗りましたが、わざわざ寒い川岸を通らせて此家の裏口のあたりまで来ると、急に用事を思い出したから、ここで降ろしてくれと言うのです。

争うほどの事でもないのです、そのまま駕籠を停めたのは、ちようど此家の裏口、垂を上げると、中から出たのは、先刻の松坂木綿らしい粗末な綿入を着た娘とは似も付かぬ、縮緬の白無垢を着て、帯まで白いのを締めた、鷺娘のよう

な、凄まじくも美しい新造だったと言うのです。

狭い駕籠の中で、どうしてそんな早変りが出来たか、渡世の駕籠屋も想像が付きません。兎に角、急に臆病風おそに誘われて、定めた駕籠賃ももらわずに、山の宿の方へ一散に逃げ出してしまったと言う話——。

「親分さん、お狐様かお雪娘か知りませんが、どうもろくなもんじゃ御座いませんよ。御用心なさいまし。へエへエ——こんなにお駄賃だちんを頂いてはすみません」

二人の駕籠屋は、余分の駄賃を貰った上、所、名前を言って帰ってしまいました。

「ね、銭形の、こいつは鎌鼬かまたちじゃなくて、お稲荷様かも知れないぜ。主人は鳥居へ小便でも掛けたことがあるんじゃないか」

万七は妙にニヤリニヤリしておりますが、平次はそれを聞くと、追っ立てる

ように外へ飛出しました。

裏口は往来を距てて大川。

もう少し先へ行くと都鳥みやどりと、瓦屋かわらやが名物ですが、この辺はまだ町の中で、岸にはいろいろのゴミが、雪と一緒に川面かわもを埋めております。

「八、物干竿ものほしざおを一本貸りて鳶口とびぐちを結ゆわえて来い」

「へエ——」

持って来た二間竿。

先に鳶口を付けて、川面の雪と雑物とを掻き廻して行くと、間もなく妙なものが引つ掛りました。

「おやッ」

引上げて見ると、少し碧血あおちに染んだ白無垢しろむく。紐で縛ってありますが、ほどくと、まぎれもない上質しろちりめんの白縮緬しろちりめんで、白羽二重帯まで添えてあるのです。



「おやッ、これはお葬とむらいで着るのとは違ちがうぜ」

と万七。

「吉原なかで、花魁おいらんが八朔さくに着る白無垢しろむくだよ。三輪の、お狐様じゃないようだね」  
平次はそう言いつて、考かんえ深ふかく水漬みずづかりの白無垢をひろげました。

## 八

白無垢しろむくは出でましたが、下した手人てはそれそれつきりわかりませせん。娘むすめを乗のせて来きたと  
いいう駕籠屋かごやまで引張ひり出でして、来きた道みちを逆さかに、稲荷いなごの社やしろまで探たずねて行いきました  
が、その辺あたりには、佐吉さきちの烏金からすがねを借かりて、ひどい目めに逢あわされていいる家いえは、門並かどなみ  
の有様ようさまですから、どこの娘むすめをしょつ引ひいて宜よろいのか、縛ばることを好このきな万七まんしちも、  
手ての下したししょうがなかつたのです。

佐吉のために、身を売った娘もあろうし、女衞せげんの真似をしている時、散々人も泣かせた筈うらみですから、怨うらみを買った覚おぼえは算かぞえ切れないほどあるでしょうが、しかし、八朔さくの白無垢を着て、雪の夜に吉原から忍んで殺しに来るほどの大胆な花魁おいらんがあろうとは想像も出来ないことです。

佐吉の傷は間もなく平癒へいゆし、お駒と与次郎は、相変らず忠実に勤めておりますが、それからは、別に変ったこともありません。もつとも、佐吉が強欲で、二人の給金を何年越払わないそうで、イヤな思いをしても、急に飛出すわけには行かない事情もあつたようです。

その次に雪の降つたのは、明けて翌年の正月十三日。この時は朝から粉雪が降り続いて、夕刻には、三寸ばかり積り、それからカラリと晴れて、大変な美しい月夜になりました。

「今晚きつと下手人を探してお目に掛けますから、掛り合いになった人を、皆

んな集めて置いて下さい」

平次からの使で、八五郎が越後屋へそう言いに行つたのは夕暮。それから支度に取りかかつて、みのわ三輪の万七とその子分、銭形の平次とガラツ八、それに与次郎とお駒、主人の佐吉、これだけ集めて置いて、いつぞやの駕籠屋二人に、さかて酒手をやって稲荷様の前に網を張らせ、浅草へ行く娘でなければ、乗せてはならぬと言ひ付けて置きました。

相変らず酒が出ます。お勝手も入口も締めず、用心が悪いようですが、名題の御用聞が二人いるのですから、あきすねらい空巢狙の心配もなく、今晚は例の居間の長火鉢の前へ、一人残らず集まつてしまいました。

よつ亥刻少し過ぎ、何となく夜の寒さが、背に沁み渡る頃、みんなが期待した通り、――

トン、トン、トン、

雨戸は鳴ります。一同はぞつと顔を見合せました。続いて、

「ちよいと、ここを——」

と、か細い女の声。佐吉も子分達もガラッ八も与次郎も顔色を失いましたが、一向平気なのは銭形の平次だけ。中でもお駒は袖に顔を埋めて、畳の上に突っ伏してしまいました。

「サア、お駒さん。お前でなきやアならない事がある。行ってあの雨戸を開けるんだ」

と平次、ガタガタ顫ふるえているお駒を抱き起すように、縁側へ伴つれ出しました。続いて、万七、佐吉、ガラッ八、与次郎。

「お駒さん。確しっかりするんだ。あれは、お前の姉さんのお才さいだよ、玉屋小三郎の抱かかえ、一時は全盛を謳うたわれた玉紫花魁たまむらさきおいらんだ。怖こわがることはない」

「あれッ——」

お駒は振りもぎつて逃げようとしたが、平次は後ろから羽搔締はがいじめにして、離そうともしません。

続いて又、トン、トン、トン、と叩く音、陰いんに籠こもったその物凄さと言うものは――。

「お駒さん、あれ、あれ、お前の姉さんが呼んでいるじゃないか。越後屋佐吉――この主人に、角兵衛獅子で何年となく虐めいじ抜かれた上、年頃になって、光り輝やくように美しくなると、自分の娘分にして、玉屋へ年一杯に売り飛ばされ、その上、佐吉夫婦が、絞しぼって、絞しぼって、絞しぼって、絞しぼり抜いて、悪い病氣かかに罹かかって、身動きの出来なくなるまで絞り取られた姉のお才だ」

「――」

平次の言葉は、物凄い空気の中に、地獄の判官の宣告のように響きました。

「お前の姉が、佐吉夫婦を怨うらんで、糸のように瘦せ細った身体で、頸くびを縊くって

死んだのは、丁度一年前、佐吉夫婦を怨んで、よく似合うと言われた八朔さくの白しろ無垢むくを着て、雪の夜を選んで仕返しに来るのも無理はない。——これだけ話せばあの外から雨戸を叩くのは。誰だかよく解るだろう。さア、お駒、怖がることはない。思い切つて開けて見るが宜い。そら、又叩いているじゃないか——」

何と言う恐ろしい緊張でしょう。主人の佐吉は積悪せきあくに責めせさいなまれるように、縁側へ崩折れてガタガタ顛えふる、ガラッ八も、与次郎も、万七でさえも、顔色を失つて、成行なりゆきを見詰めるばかりです。

「お駒、お前が開けなければ、俺が開けてやる。それ」

平次の手は雨戸にかかると、アツと言う間もなく一枚引開けましたが、外は、雪の上に照る十三夜の皎月こうげつ。狭い庭はたった一と眼に見渡されますが、物の翳かげもありません。

「玉紫たまむらさきの花魁おいらん。

よく聴くが宜い、お前の妹のお駒は、一生困らぬだけの金を持

たせて、明日にも故郷の越後へ歸してやる。もうここへ出ちゃならねえぞ、解つたか——南無阿弥陀仏」

平次が月の庭へ手を合せて拝むと、お駒も、佐吉も、ガラツ八も、釣られたように、念仏を称とえて、白々とした庭を眺めやるのでした。

明る日、お駒は溜たまった給料を受取った上、外に手当百両を貰い、平次とガラツ八に送られて、故郷の越後へ発ちました。確まちづかな道伴を見付けて、板橋から別れる時、

「親分、この御恩は忘れません」

お駒は何べんも何べんも繰り返して、江戸へ引返す平次の後姿を拝んでおります。半面大焼痕おおやけどの醜みにくい女ですから、道中も先ず無事でしょう。平次は重い荷をおろしたような心持で、ガラツ八と一緒に歸つて来ました。

「ね、親分。あの下手人は玉紫とか言う花魁おいらんの幽霊なんですかい」とガラツ八、少し獅子しし鼻はながキナ臭くうごきます。

「馬鹿、幽霊が人を殺してたまるもんか」

「すると」

「お前だから話すが、人に言うな、あれは皆んな、お駒の細工さ」

「へエ——」

「お勝手からそつと出て、遠廻りして庭木戸を入れて、姉の仇あたを討つつもりだったんだよ。帰る時は身体が軽いから、羽目を越して下肥汲しもじえくみの通る細い路地から、アツと言う間に自分の部屋へもぐり込んだのさ——」

「白無垢で、雪の晩だけねらったわけは？」

「白無垢は姉の形見かたみさ。あんなものが、玉屋から届いたガラクタの中にあつた事を、佐吉も気が付かなかつたんだ。稲荷様へ行つて、駕籠かへ乗つて中で着換きか



えたのは、わざわざ遠方から来た、怪物えてもものに見せようと言う細工さ。あの女はあれでなかなか馬鹿じゃないんだよ」

平次の話は明快ですが、たった一つ、まだガラッ八にも解らないことがあります。

「昨夜ゆうべのはすると誰です。お駒も中にいた筈だから——」

「馬鹿だなア。お品さんは、そんな事にかけてちゃ、申分のない役者だよ。稲荷いなり様から辻駕籠に乗って、お駒がやった通りに運はこんだまでの話さ——そうでもしなきやア、佐吉は百両と言う大金を出す気にならないだろうし、何時かはお駒が下手人げしゅにんと言うことが解って、三輪の万七兄哥などに縛られるよ」

昨夜ゆうべの白無垢しろむくは、石原の利助の娘のお品とは、佐吉も万七も、当のお駒も気がつかなかったでしょう。

「へエ、そんな事をしてても宜いんでしょうか」

「何をつまらない。御法度の敵討さえ、筋が立てば、大ビラにやらせる世の中じゃないか。姉妹二人十何年も死の苦しみを嘗めさせられて、その上姉が首を吊ったんだ。その仇を討った妹を縛れって言うなら俺は十手をお上へ返すよ」

平次は感慨深くそう言いました。滅多に人を縛らぬ、一名縮尻平次は、こうして『雪の精』を見逃してしまつたのです。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵—萩 柚月

初出—「文藝春秋オール讀物號」昭和七年十二月号 文藝春秋社

底本—「錢形平次捕物全集」第一卷 河出書房 昭和三十一年五月五日初版

編集・発行 銭形倶楽部

雪の精



# 錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>